

# 近代の認識形式としての視覚優位性 — 視覚と空間・主体／客体・知・表象を中心として —<sup>1)</sup>

丸 山 真 純

## Abstract

This paper explores visiocentrism as a dominant perceptual mode in modernity, with particular attention to the development of perspective as a means to mirror reality as itself, and its implications for other aspects of modernity. First, the development of perspective provides a framework of subject as an observer/viewer and object as an observed/viewed, which creates a sense of ego or “I.” Second, perspective creates space between the subject and the object, and regards the space as homogeneous, absolute, and mathematically measurable and calculatable. Third, the relationship of the viewing/the viewed leads to the notion of viewing as knowing in which science (original meaning of which is to know) is conducted as objective discovery of reality. Fourth, knowledge and power is discussed in terms of “Subjectivism” or “Anthropocentrism” and subject as an object, which perspective entails. The last section of this paper seeks to integrate the discussion of perspective and its implications through Heidegger’s idea of “World Picture.”

**Keywords:** modernity, visiocentrism, perspective

それにしても、地球化を語る上で、注意しておかなければならない点がある。

---

1) 本論文は平成15-16年度文部科学研究費（若手研究B）の助成を受けて行った研究の成果の一部である（研究課題名：知的営為としての（異）文化研究に関わる研究；研究者：丸山真純；課題番号：15730247）。

それは、人種、民族、国民を歴史的に不変の単位としてあらかじめ想定する習癖である。この習癖に従うと、世界は「地方的（ローカル）」で永続的な人種や民族、国民といった特殊な同一性と「地球的（グローバル）」で絶えず変化する普遍的な国際的動向とに二極化され、地球化は国民の「外から」やって来ることになるだろう。地球化に反対するためには、国民の内側にたてこもり、「外から」やってくる地球化の波をいかに防ぎ止めるかという図式から発想することになり、地球化を批判的に検討することは、不可避的に、国民主義擁護となってしまふ。（論壇：「地球化」と国民幻想の逆説 21世紀の入り口で2，酒井直樹，朝日新聞，2001年1月3日）

人間が得る外部の情報の95パーセント以上が視覚によるものだといわれています。そのことを裏付ける文化がこの300年かけて築かれてきたのだといえます。これは、単に一生物の情報受容ということだけでなく、ヴィジュアルを利用した政治から文化にいたる「制度」の大問題でもありました。その制度基盤を端的に「近代」と呼ぶことができるように思います。（『表象の芸術工学』高山宏，55ページ，2002年）

## 0 はじめに

「異文化コミュニケーション論」は科学技術の発達などによる地球の相対的縮小に伴う、文化背景が異なる人々への意識の高まりと、そうした人々との「誤解が少なく、効果的にコミュニケーション・理解する能力」や「うまくそうした人々を理解し扱うこと」を促進するという実際的関心とともに起こってきたといえる（Gudykunst & Kim, 1997, p. 4）。異文化コミュニケーションの初期研究が留学生や平和部隊、海外駐在員のいわゆるカルチャ・ショック研究を中心に行われたこともこのことを示唆している。

こうした実際的関心は、言い換えるならば、ウォーラステイン（2002年）の言う「近代世界システム」の進展とともに、必然的に生じたと言える。つまり、こうした関心は世界システムが要求する効率的、円滑なコミュニケーションを是とするような価値観に支えられている。このような価値観はマク

ロレベルでは「近代性（文化としての近代）」と密接なかかわりがある。この近代性はグローバルレベルで浸透し、物質的豊かさというような肯定的効果をもたらした一方で、さまざまな否定的な結果もまたもたらしている（例えば、貧富の差、環境破壊、生物文化的多様性の減少など）。近代をめぐっては、近代の外側から批判するアプローチが見られるが、われわれは良くも悪くも近代の枠組みの中にいる（詳しくは後述する）。したがって、異文化コミュニケーション研究にとって、その大きなパラダイムを支える近代性の構造を理解し、近代を内側から批判的に検証することが重要である。

本論文は、こうした観点に立脚し、近代性の構造の一端を、その特徴的な認識形式の観点から接近する。具体的には、ジャン・ゲブサー（Jean Gebser）の *perspectival consciousness* に着目し、イタリア・ルネサンス期に発明された遠近法 *perspective* とそれが含意する近代の認識形式の特徴（端的には、「視覚中心主義」）について考察する。

## 1 問題意識

本論文の目的は近代性（文化としての近代）を理解する一試みであるが、その問題意識は主として、以下の三点にある：(1) 近代からの影響；(2) 文化研究自体の文化性の問題；(3) グローバル／ローカルという本質主義的二項対立図式の問題である。

### 1.1 近代からの影響

第一の問題意識である「近代からの影響」とは、私たち、とりわけ先進諸国と呼ばれる国々の人々は、ヨーロッパに歴史文化的起源を持つ「近代性」に多くの影響を受けているという明白な事実から来るものである。さまざまな科学技術、経済システムなど、われわれの周囲はこうした近代の産物に囲まれている。こうした物質的なものだけでなく、価値観や行動様式といった

ものも先進諸国に共通して見られるものも多くある（例えば、効率、便利さ、経済合理性を重視するなど）。また、後述するように、学術的営為（それは多くの場合、広義において、「科学をする」ということでもあるが）は、ヨーロッパに起源を持つものである。多くの、いわゆる伝統社会には、自らの周囲世界を対象化、問題化し、分析し、場合によっては批判的検証を行い、それをあるフォーマットにしたがって記述するという制度化された営為は「伝統的」には存在しない。

さらに、いわゆる「グローバルゼーション」を地球規模での「近代」の浸透・普及ととらえた場合、「グローバルゼーションとは何なのか」「それは何をもち、どういった地球社会を構想することなのか」といった問いに答えるためには、近代性への理解が重要なことであると考えられる。

## 1.2 文化研究の文化性

第二点の「文化研究の文化性の問題」とは、文化を研究するという営み（営為）をどのように位置づけるかという問題である。つまり、文化を研究するという営為自体が、文化の定義（一般的には、「人間の生活様式一般」）に参照すれば、文化的営為である。言い換えるならば、文化を研究するという様式も文化の範疇に加えられてしかるべきものである。さらに言えば、前述したように、多くの「文化」、とりわけ、「伝統社会」と呼ばれるような非西洋文化では、文化を対象化、問題化、テーマ化し、分析し、批判的検証をするという態度・意識は少ない。つまり、自文化や異文化について、分析的に思考するという営為は、多くの非西洋文化には伝統的には限定されたものである。いわゆる非西洋社会である先進諸国においても、伝統的には、こうした態度・意識は優勢ではなかった。日本においても、近代西洋で用いられていた（る）cultureの翻訳としての、今日の（学術的）意味を持つ「文化」が明治期のものであり、それが普及したのも大正期である（西川、1995年）。

このことから、比較的近年の現象であることが分かる<sup>2)</sup>。さらに付け加えるならば、文化にとどまらず、近代西洋文化的な周囲世界を対象化しようとする態度や意識は（その対象化が、自然であれ、環境であれ）、非西洋文化には、伝統的に、多くの場合、相対的に小さかった。

文化を含めて周囲世界を対象化し、分析（考察）しようという態度・意識、あるいは認識形式は、端的には、近代西洋に特有の文化形式である（詳しくは、後述する）。文化を研究し、それを記述するという営為は必然的に文化的なものであり、決して、価値中立的、客観的（普遍的）、culture-free、あるいは超越的（transcendental）なものではない。文化を意味ある形で研究し、記述できるという前提はルネサンス以降の西欧に特有の認識形式なのである（Kramer, 1992）。つまり、時間と空間的制約を受けた文化的営為なのである。

このことは、文化を研究するという文化的営為を行いながら、研究対象を文化的現象として分析、表象することの意味を考える必要があることを示唆している。特に、研究者の位置という問題から、このことに接近する必要があると思われる。つまり、研究者もある文化的枠組みで思考しているのにもかかわらず、ある文化を描写するが、その描写された文化とはいかなる意味を持つものなのかを考える必要があると思われる。先に述べたように、文化を対象化するという営為は、ルネサンス以降に顕在化した認識形式である。その文化的認識形式に基づいて記述された、ある文化とはどのように理解する必要があるのかを考えることは重要である。そのためにも、文化研究の文化性を含めた、近代性の考察は文化を研究する諸学問領域にとって、必須のことであると考えることができる。

---

2) 明治期の翻訳である、現在の意味での「文化」は、その後、中国語にも輸出され、cultureの翻訳語として、中国語でも用いられている。詳しくは、西川（1995年）を参照のこと。

さらに、近代西洋においても、今日的な意味での「文化」は、近代における文化人類学の発明である（テッサ・モーリス＝鈴木、1996年；戴、1999年）。

### 1.3 「グローバル vs. ローカル」という図式

本論文の第三の問題意識として掲げた「グローバル／ローカルの本質主義的二項対立図式」については、文化研究の中にも見られ、また人々一般の中にもある思考・認識様式である（とりわけ、グローバリゼーション批判の文脈で）。冒頭に引用した酒井直樹の指摘のとおり、その思考・認識様式とは、外側からやってくる「グローバル」なもの（「かれら」）と、内側の「ローカル（特に、ナショナル）」なもの（「われわれ」）の二分化である。グローバリゼーション批判においては、グローバルなものを外側として位置付け、ローカルなものは、この外側であるグローバルなものに、汚される存在として位置づけられる。このローカルな内側を守るために、内側の論理（独自性）から批判するという位置取りがよく見られる（本質主義、文化帝国主義など）。たとえば、かつての「日本人論」・「日本文化論」<sup>3)</sup>に見られたように、内側である「日本人」や「日本文化」を、外側と比して、ユニークなものとして捉える視点は、こうした思考・認識様式を示しているといえる。この思考・認識様式は、「純なもの／不純なもの（汚れたもの；外部からの輸入物）」という本質主義的、境界的発想を導き出すが、さまざまな意味で逆説的である。第一に、日本（人・文化）を分析的に理解・研究するという思考・認識形式は、上述したように、たぶんに、「日本的」ではないこと（つまり、西洋近代に歴史文化的な流れをもつものである）。第二に、ここで国民国家の歴史的展開を論じる余裕はないが、国民国家という枠組みもまた、西洋近代の歴史文化的流れを汲んでいること。そういう意味において、わたしたちは、いわばグローバル（近代）の中にいる、あるいは絡み取られているといえる<sup>4)</sup>。しかし、本論文で、それゆえに、西洋近代の文化的先入見・偏見を持たない

3) 日本文化論・日本人論に向けられた批判については、例えば、吉野（1997年）、杉本・マオア（1995年）、西川（1995年、2001年）、ベフ（1997年）などを参照のこと。

4) 絡み取られているのは限界でもあるが、そこから抜け出せないという意味ではなく、むしろ可能性を開くものとしての絡み取られである。この「限界＝可能性」については、詳しくは池田・クレーマー（2000年）を参照のこと。

形で、「日本文化」を研究することを提唱しようとしているのではない。むしろ、こうした文化的先入見・偏見を持たずに「日本文化」（や異文化）を研究できるとする前提の文化性、文化を研究するという営為自体が文化的営為であることを問題にしたいのであり、そうした文化の表象のされ方の権力性を最終的には明らかにしたいのである（つまり、誰が、何のために文化（人々）を表象するのか、そして、その産出された表象を自発的に受け入れる側との構造的問題である）<sup>5)</sup>。

いずれにせよ、この「グローバル vs. ローカル」という位置取りや、それに基づいた（グローバリゼーション）批判は西洋近代的であり、「グローバル vs. ローカル」という図式よりも、私たちが絡み取られている近代の中から、この近代を理解し、批判する必要がある。グローバルなものに対抗するために、「ローカル（ナショナル）」を対置するのではなく、近代性の枠組みの中で、いわば、近代がもたらしたものを appropriation すること、戦略的に利用することによって、近代性の持つさまざまな矛盾に抗していく必要があると考える。そのためにも、近代性の理解は異文化コミュニケーション研究を含めた文化研究にとって、必須の意味を持つと考えられる。そして、この近代性の理解に基づいて、（異文化）コミュニケーション研究が寄与できることを構想すべきである。

#### 1.4 論文の目的・概要・構成

上述した三点は、近代性を理解することが異文化コミュニケーション研究において重要な意味を持つことを示している。本論文は、この近代性の理解を「視覚中心主義」「視覚の特権化」という観点から考察することを目的としている。「視覚中心主義」「視覚の特権化」とは、「見ること」「まなざし

---

5) この表象と権力性の問題は、本論文の目的を越えるので、別の機会に詳しく展開したいと考えるが、この問題は（異文化）コミュニケーション研究の中で、さらに研究されるべきトピックのひとつであると考えられる。

(まなざすこと)」「観察(すること)」「視点」の重要視化,あるいは「眼」の重視と言い換えられる。つまり,近代性を,視覚を特権化し,強調する文化という観点から理解を試みる<sup>6)</sup>。

近代社会を一つの文化形態として考察する場合,さまざまな観点から考察することが可能であるし,またそのように行われてきたのも事実である(たとえば,テンニース(1957年)の「ゲゼルシャフト」と「ゲマインシャフト」など)。本論文では,意識構造・認識構造の特異性の観点からこの点にアプローチする。この意識構造・認識構造の観点からアプローチする上で重要であるのが,近代の特徴を視覚優位・特権化した文化形態として捉える方法である。この視覚優位・特権化について,本論文では,遠近法の展開とその示唆に焦点を当てて考察を試みる。近代(性)の誕生に関わる視覚の特権化については,さまざまな側面から考察可能である。たとえば,アルフレッド・W・クロスビー(2003)はその著書『数量化革命:ヨーロッパ覇権をもたらした世界観の誕生』のなかで,この視覚の特権化について,時間(機械時計・暦),空間(地図・海図),音楽(楽譜),絵画(遠近法),簿記から考察している。また,マンフォード(1974年)は都市をめぐって,ローティ(1993年)は「見ること」を近代西洋哲学の特質として,それぞれ視覚の優位性を論じている(山中,1999年)。また,マクルーハン(1986年,1987年)やオング(1991年)は文字や印刷という,明らかに視覚的メディアがその後の社会変容(意識変容も含めた)へ与えた影響について論じている<sup>7)</sup>。

本論文では,遠近法(perspective)の発明を視覚の特権化/視覚の優位性の表れとして考察することとし,それが示唆すること,とりわけ,近代的個人(主体・自我)の誕生,機械的均質空間(意識)の成立,客体として世界を理解する様式(近代科学)の展開,知と権力の関係について考察する。

6) ここでの表現も,まさに視覚中心的・特権的表現であるが——このことは,私たちが文化を置き去りにして何かをすることができないことを端的に示し,またいかに私たちの営みの多くが近代というものに規定されているかを示唆しているといえる。

7) マクルーハンやオングの議論については,吉見(1994年,2004年)を参照のこと。



## 2 視覚優位としての近代：遠近法とその意味

### 2.1 ゲブサー理論と遠近法

近代（近代社会）を特徴づける概念は多様にあるが、本論文では、その鍵概念として、意識構造、認識構造を近代社会（近代性）を特徴付けるものとしてアプローチする。とりわけ、そのなかでも、近代社会の意識構造・認識構造における『視覚』の優位性、特権化という観点から近代性の理解を試みる。

意識構造・認識構造の観点から近代性を考察する上で、参考となるのは、比較文明学者である、ジャン・ゲブサーの文化歴史的分析を通じて構築された意識構造理論である。ゲブサー（Gebser, 1985）はさまざまな文化的表現に現れた意識構造の変異（mutation）に着目することによって、文化（歴史を含めた）を理解しようとした。彼は意識構造の変異を“Unperspectival” “Perspectival” “Aperspectival” に分類し、歴史を通じて、“Unperspectival” “Perspectival” “Aperspectival” へと意識構造が変異してきたと論じる<sup>8)</sup>。近代を特徴付け、それ以前と特徴を分かち意識構造として、perspectival という語を用い；近代以前の意識構造を unperspectival；現在表れつつある新しい意識構造として、aperspectival といった用語で、意識構造を特徴付けた<sup>9)</sup>。ゲブサーは次のように説明する：

わずか500年前、ルネサンス期に、私たちの意識の間違いようのない再構成が起こった：遠近法の発見である——遠近法は空間の三次元化を開始した。この発見は近代の時代 Modern Epoch のすべての

---

8) ただし、一つの文化がこの意識構造のどれかに当てはまるというわけではなく、一つの文化・社会の中においてもこれらのすべての意識構造が存在している；「プラスミュレーション」（Gebser, 1985）。

9) 本論文の主たる関心は、近代を意識構造・認識構造の観点から理解を試みるもので aperspectival については、言及を最小限にとどめる。

知的態度と密接に関わっているので、この時代をパースペクティブ Perspectivity の時代と名づけ、この時代の前の時代を “Unperspectival” 時代と特徴づけざるを得ない。これらの定義は、これらの時代の基本的な特徴を認識することによって、今始まりつつある新しい意識の時代の定義を “Aperspectival” 時代へとさらに導く——近代物理学の結果ばかりでなく視覚芸術や文学の展開によっても支持される定義である（こうした分野では、四次元目として時間を以前の空間概念に組み込むことが「新たな」を表す最初の基礎を形成している）。

（2 ページ；強調原典；訳筆者）

これらの “Unperspectival” “Perspectival” “Aperspectival” という意識構造で着目すべきは、ゲブサーは、意識構造を理解するうえで、“perspective” をその特徴としてとらえていることである。つまり、“Unperspectival” は perspective がないこと、“Perspectival” は perspective があることであり、“Aperspectival” は perspective を超えたということである<sup>10)</sup>。

perspectival とは聞きなれない用語であるが、perspective の形容詞である<sup>11)</sup>。perspective という語は、現在では、日本語でもそのまま「パースペクティブ」のように用いられ、「視点」「観点」の意味で使われる。しかし、perspective とは、本来「遠近法」の事を指す。この語の語源はラテン語の perspicere、「明らかに見る」という意味で、これはギリシャ語からの直訳

10) ゲブサーは unperspectival, perspectival の時代に続く時代を aperspectival と名づけたが、この a- は illogical (非論理的な), logical (論理的な), alogical (論理を超えた), immoral (不道德な), moral (道徳的な), amoral (道徳的でも不道徳的でもない, 道徳外の) と同じ関係で用いていると説明している (2 ページ)。また、「aperspectival という用法は、perspectival と unperspectival の独占的有効性からの、そして pre-perspectival の限界からの解放のプロセスを表している (2 ページ)」と説明している。

11) Oxford English Dictionary (OED on CD-ROM) によると：

Of or pertaining to perspective (perspective について、あるいは関わる) とある。

である（パノフスキー，2003年）。デューラーはこの言葉を「透かして見る」と解釈したという（パノフスキー，2003年）。遠近法は次のように説明される：

絵画などの2次元平面に、現実の3次元空間の物象を、実際にみえるのと同じような距離感で表現する方法。遠くのものより近くのものより小さくかすんでみえる、という光学の法則にもとづいている。狭義では線遠近法をいい、広義では空気遠近法など3次元空間を2次元に表現するすべての方法をいう。（「マイクロソフト・エンカルタ総合大百科」）

厳密な意味での遠近法を技術的に作り出したのは、15世紀のブルネレスキーであり、アルベルティらによって継承された（「ネット大百科」の「遠近法」の項）。このイタリア・ルネサンスに発明された遠近法は、それより以前にあった遠近法とは異なり、科学、とりわけ数学的原理と結びつけられ（佐藤，1997年）、ユークリッドの幾何学に基づく世界把握を創造したこと（犬伏，1997年）に特別な意味が見出される。本論文における「遠近法」という用語は、こうした意味での遠近法であり、パノフスキー（2003年）の次のような説明に基づくものである：

単に家とか家具とか個々の対象が縮尺されて描かれているような場合にではなく、画面全体が…いわばそれを透してわれわれが空間をのぞきこんでいるように思いこむ「窓」と化しているようなばあいには、——したがって、個々の人物や物の形体が画像としてそこに載せられていたり、立体的にそこに取り付けられていたりするように見える物質としての画面や浮彫面がそれとしては否定され、それを透して垣間見られる全体的空間、すべての個物を包み込む全体的空間がそこに投影される単なるスクリーンとしてとらえなおされているような場合

に——，そしてそうした場合にのみ，まったく意味での「遠近法的な」空間直観がおこなわれていると言うことにしたい，ということである。(8-9 ページ)

この遠近法的な空間直観には，二つの前提がある<sup>12)</sup>。一つは，目をあちこちと移動させるものではなく，不動の目で見ているということ (glanceではなく gaze)。もう一つは，遠近法によって切り取られ，映し出されたものが目に写ったものの忠実な再現であるということである。しかし，この二つはいずれも事実と反する。それは，わたしたちは常に動く目で見るとして，遠近法は平面に切り取られるが，実際の目は平面ではなく，凸面である。したがって，遠近法は現実をありのままに映し出していると思込みは正確ではなく，むしろ，それは世界を把握するための「象徴 (シンボル) 形式」(カッシーラ，1994年) である。

にもかかわらず，遠近法が世界を忠実に (ありのままに) 映し出し，3次元のものを2次元に実際と同じように表現しているとする認識は，単なる文化的，技術的発明とだけ捉えることはできない。というのは，この遠近法 perspective の発明には，ゲブサーがこの遠近法の発明以降の意識構造を perspectival と呼んでいるように，そこにはそれまでとは異なる深遠な意識構造の変異があるからである (televisuality<sup>13)</sup>)。

## 2.2 遠近法とその意味

この遠近法の発明・展開が視覚と関わっているのは，明らかである。中村 (1997年) が指摘するように，近代の特徴は，ルネサンス期の遠近法によって，視覚が支配的な位置を占めるようになったことである。また，New School University の *televisuality* のオンライン授業も，視覚性の時代の議論

12) ここの記述には，HP「空間概要の変容」を参考にした。

13) これは，New School University のオンライン講義，*televisuality* の spectatorship に関わる内容である。

を始めるのに、遠近法の考えを紹介することから始めている。それによると：

ルネサンスの遠近法の考え方を最初に述べずに、視覚性の時代について語ることは不可能であろう。これは視覚性の歴史的再構築の必要性からではなく、遠近法が社会的コミュニケーションの特有の融合——特有の社会的文化的形成の表現——を表しているからなされるのである<sup>14)</sup>。(televisuality；筆者訳)

この視覚を他の感覚よりも重要視する傾向は、私たちの学術的営為でよく使われる「観察 observation」「描写 description」といった表現や、さらには理論を表す theory の原義が to view(見ること)であることから示唆される。

ここでは、遠近法が持つ深遠な意味について、以下の観点から考察する：

(1) 主体/客体の構築；(2) 均質空間の成立；(3) 近代科学（客観主義）との関わり；(4) 知と権力の問題である。

### 2.2.1 主体/客体の構築と分離：わたしの誕生

遠近法的な物の見方・認識形式・態度が含意するものの一つ目は、「見る者」(主体 subject) と「見られるもの」(客体 object) という関係を構築することである。この二分法は、この「主体/客体 subject/object」という表現以外にも、さまざまに表現される：「観察者/観察対象 the observer/the ob-

14) 原文は：

It would be impossible to talk about regimes of visibility without first addressing the Renaissance notion of perspective. This is not done out of a need for an historical reconstruction of visibility, but because perspective represents a particular amalgamation of social communication --the expression of a particular social and cultural formation....

である。

served」「知る主体／知られるもの the knower/the known」「the viewing/the viewed」などである。このことは、つまり、世界を見る主体である「人間」と見られる（観察される）「客体」（「もの自体」）に分離して、世界を認識するという形式を、この遠近法は示唆している。主体の世界と客体の世界の分離である。さらには、この遠近法の織りなす「～を見る」ということは、見られる客体とは明確に切り離される（detached, dissociated）、これを見る主体としての『私（ego/I）』という意識を生み出す。視線を放つ I/ego と視線を受ける対象である。見ている「私」（主体）と、その私によって見られているもの（対象・客体）という関係が構築される。

そして、この「私」は個人 individual、いわゆる近代的自我・個人<sup>15)</sup>である。これを、(近代合理的) 人間・個人の構築（誕生）と表現しても差し支えないであろう。この遠近法的認識・世界観は個人主義的世界と密接と関わっている（それ以前の世界——つまり、Unperspectival な世界——は、集団主義的世界と関わっている）。ゲブサー（Gebser, 1985）は次のように説明している：

…Unperspectival 世界は、後期古代に発見され、予想され、そして、レオナルド [・ダヴィンチ] の適用によって初めて明白になった、精神や自我に縛られた遠近法の世界に先行する。このように見ると、Unperspectival 世界は集団主義的で、Perspectival 世界は個人主義的である。つまり、Unperspectival 世界は無名の「一 one」あるいは、部族的「われわれ we」と関係しており、Perspectival は「私 I」あるいは自我 Ego と関係している；一方の世界は「～のままである Being」に根ざしており、他方は、ルネサンスに始まり、「所有すること Having」に根ざしている；前者は非合理的であることが支配的

15) individual は、ラテン語 individuum に由来し、その意味は、“indivisible, inseparable”である（OED；今村，1994年）。つまり、「分離できない」を意味する。

で、後者は合理的である<sup>16)</sup>。(3 ページ) (筆者訳)

### 2.2.2 均質な空間の形成

遠近法が示唆する深遠な意味の二つ目は、均質な空間、絶対空間の誕生である。第一の特徴として論じた「主客分離」の認識形式は、「見る・観察する主体」と「物自体 (客体)」が別々の位置にあることを前提とし、見る主体は見られるものの外側に距離をもって、視点を置く (つまり、見られる客体の外側に立つ) という形式である。これは「見る主体」と「見られる客体」の間の距離 distance・空間 space・隔たりを意味している。空間を眼前に広がるもの、あるいは広がりを持つものとして認識していると言える。「視覚空間」という表現はこれを端的に表している。さらに、遠近法にとって重要なことは、この距離・空間が均質で不変なもの、つまりユークリッド幾何学に基づいた空間を前提としている<sup>17)</sup>。それは、遠くのものを小さく、近くのを大きく描くことと密接に関わっている。この対象の描かれる大きさは目から広がるその対象までの距離に応じて (ratio) 決定される。であるから、距離が数量化・測定可能なもの (つまり、均質で、絶対的空間として、とらえられなければならないのである)<sup>18)</sup>。こうした空間はニュートン

16) 原文は：

...the unaperspectival world preceded the world of mind- and ego-bound perspective discovered and anticipated in late antiquity and first apparent in Leonardo's application of it. Viewing in this manner the unaperspectival world is collective, the perspectival individualistic. That is, the unaperspectival world is related to the anonymous "one" or the tribal "we," the persepectival to the "I" or Ego; the one world is grounded in Being, the other, beginning with the Renaissance, in Having; the former is predominantly irrational, the later rational. (Gebser, 1985, p.3)

である。

17) こうした均質な空間認識は遠近法によって醸成されていった (犬伏, 1997年)。

18) 先に述べたように、遠近法がイタリア・ルネサンス期に見出されたという表現は、遠近法が空間の数学的把握と結びついたからである。

的空間と呼ばれる。遠近法は現実を大胆に抽象化し、直接の経験とは無関係でなじみのない空間である抽象的な機械的な空間を創ったと言える (*televisuality*)。こうした空間を数学的に理解しようという態度は世界を数学的に理解する（それは、数学によって可視化——目に見えるようにする——ことである）意識・態度と密接に関わるようになる。のちにフッサールによって厳しく批判されるガリレオの有名な言葉、「自然という書物は数学という言葉で描かれている」は、こうした認識形式を明確に表していると言える。

### 2.2.3 近代科学：客観主義

遠近法が示唆する第三の点は近代科学と客観主義の成立である。上述したガリレオの「自然という書物は数学という言葉で描かれている」は客観性が数量化によって担保されることによって、自然科学において発展・展開するのであるが、この自然科学の発展・展開も、これまでの議論で示唆されるように、遠近法的なものの方が密接に関わっていると言える。遠近法が織り成す「主客分離」の認識形式は、先にも述べたように、外部世界として客体、つまり「自然（物自体）」を構築する。そして、その自然（物自体）をありのままに（＝客観的に；あるいは主観が入らないで）描写するという様式へとつながる<sup>19)</sup>。ここで、このありのままに見る・観察する際に、遠近法で対象を見るのと同様に、眼はあちこち動かされるべきものではなく、固定された一点から、そして四角い枠組み *framing*<sup>20)</sup> で、現実の一部分を捕らえる。

19) 本来、このありのままに描写する主体が存在するはずであるが、主体の世界と客体の世界が独立に存在すると認識する主客分離の様式は、ありのままに客体を見る・観察する主体の地位はこの認識様式の中では不可視化される。このことについては、次の「知と権力」の中で詳しく論じる。

20) *framing* とは絵の周りにある四角い額縁のことである。*framing* に基づいて、雑多なものから関心のあるものだけを切り取ることを *framing* と表現するが、わが国では、*framing* を「見切り」と訳した（高山，2002年）。非常に適切な訳語であるように思われる。



gaze であって, glance ではない。それは, 時間・空間を固定 freeze した上で, 現実を切り取るということである。こうした作業によって, 対象がまさに構築されるのである<sup>21)</sup>。

こうした主体の外部としての対象(自然)は, 神が作り出した秩序をもつ, つまりシステムとしての自然という考え方と結びつくことによって, 科学が誕生する。秩序をもったシステムとしての自然は「機械論的世界像」と一般に呼ばれるものである。これはキリスト教の「神の手によって創造される支配される被造物=秩序」という世界観でもある(生越, 1999年)。「主体と客体の分離」とこの「機械論的世界像」が結びついたところに自然科学は誕生することになる。そして, 遠近法の認識形式が自然科学の認識形式と密接にかかわりがあることが明らかになるのである。

これまでの議論から明らかになったように, この科学が要求する認識形式は対象を観察する, 見るということ, つまり, 視覚に基盤を置いている<sup>22)</sup>。科学をあらわす science とは, その原義は「知る」ことである。ここに「見ること」「観察すること」が「知ること」と同義になるのである<sup>23)</sup>。

#### 2.2.4 知と権力

遠近法の認識形式が示唆する第四の点は知と権力の問題である。この知と権力の問題は「人間中心主義」および「近代主体の形成」の二点から考察する。

---

21) そうした意味では「対象」とは「表象」のことであると考えられる。この点についてはのちに考察する。

22) 科学的・学術的営為で用いられる theory (理論) の原義は viewing であり, speculate (考える・熟考する) も, 綴りが示しているように, 原義は seeing であり, 科学にとって, 目や見ることが大きな位置を占めることがわかる(原義については OED on CD-ROM を参照した)。

23) 英語における, I see that. は「私はそれを見る」という意味と, 「私はそれを理解する」と二通りの意味があるが, ここにも「見る」ことが「理解すること」すなわち「知ること」と密接に関わるという文化的バイアス(視覚優位文化)が見られると考えることができる(高山, 2002年)。

人間中心主義（主観主義） 遠近法の枠組みは、前述したように、見る主体としての「人間」と見られる客体としての自然の対峙・対立の構図を作り出した。また、前述の「遠近法と近代科学」で述べたように、客体（対象）を「見ること」と「知ること」が同義となった。中村（1992年）は、ジャンセニウス、アドラー、フーコーの考察を踏まえながら、「見ること＝知ること」は感覚を楽しむこと（快楽）、あるいは対象を支配することとつながっていることを指摘している。見ることの快楽とは、まさに対象を見ることの楽しみ、まなざしの快楽であり、「熱いまなざしによる対象との一体化」（77ページ）である。中村はさらに続ける：

このようなまなざしの快楽もあって、それはマニエリスムやバロック芸術の世界にはつよく出ています。しかし古典主義の時代になると、だんだん抑制が効いてきて、冷ややかなまなざしというか、まなざしによる支配の方向にとってかわられます。そして、近代における冷ややかな「視覚の支配」があらわれてくるのです。この冷ややかなまなざしは、見るものと見られるものとの対立を生み出すとともに、支配の道具として視覚が使われるようになります。（77ページ）

このようにして、世界の中心＝主体（the center of the universe）として人間が「客体＝自然」を「見ること＝知ること」によって、客体＝自然を操作・管理・支配することによって、それを従属させる対象（客体）になる。従属させるとは対象（自然）を人間の手中に（というより「目の中に」の方が適切かもしれない）収めることを意味する<sup>24)</sup>。よく知られているように、科学の目的は：客体（対象）を（因果関係から）説明 explain, 予測 predict, そして、支配（制御）control することである（LITTLEJOHN, 1992）。ここに、

24) 目の中に入れることは、絵として写し出すことを想起させる。描かれた絵がまさに目の中に治められ、管理・制御の対象となるのである。遠近法と解剖学が結びついてルネサンス絵画の支えとなったという指摘（佐藤，1997年）は興味深い。

中世の呪縛を抜け出し、神ではなく人間がその中心であるという人間中心主義的世界観が構築されるのである。

この客体としての自然を、操作・管理・支配した典型として、近代都市があげられる。近代とは都市文化であるという考えがあるが（たとえば、クレーマー、2002年；Kramer, 2003）<sup>25)</sup>、この都市はまさにこうした人間中心主義的意識を表しているといえる。養老孟司は唯脳論の立場から、近代の特徴を都市主義であると考え、脳、つまり、人間の意識が作り出したものとしての都市<sup>26)</sup>（つまり、自然を操作・管理・支配したものとしての都市）を論じている。これは、われわれの前にある（見える）対象としての自然を意識することであり、それをさらに人間に都合のよいように変えたものを意味する（養老、2002年）。

近代主体の形成 人間中心主義は、世界の中心である主体としての人間が「見る=知る」ことによって、客体=自然（世界）を支配・管理することであるが、この「見る」「見られる」という関係は、人間と自然にのみ、あてはまるのではなく（いわゆる「モノ」が客体化されるばかりではなく）、人間もまた、見られる対象（客体）となることを意味する。つまり、「客体としての主体（subject as object）」である。これは見られる対象としての人間が支配・管理・統制の対象になるという意味でもある。これを典型的に示し

---

25) 近代と都市の関係、とりわけ個人主義や産業化、資本主義的経済との関係については、丸山（2004年）を参照のこと。

26) 自然を操作、管理、支配した都市と対を成すのは自然がありのままに残っており、人がそれと調和しているような場所としての田舎あるいは農村である。この田舎・農村は人間（主体）が客体である自然を克服していないという意味で、人間中心主義的世界観では「遅れた」あるいは「停滞」したものと見なされる（この点は、クレーマー（2002年）、Kramer（2003）を参照のこと）。この「遅れた」「停滞した」という意識は、また近代に特徴的になった無限的直線の時間意識と密接に関わっている。近代と直線的時間意識のかかわりについては丸山（2004年）を参照のこと。

ているのが、ミシェル・フーコー（1977年）の言う、ジェレミー・ベンサムが考案した刑務所「パノプティコン（panopticon）<sup>27)</sup>」である。フーコーは、この「パノプティコン」を監視された社会環境の比喩として用いた。この施設は、塔の上に立つ監視者は収監者から見られずに、収監者全員を見ることができ。あるいは、収監者から見えない訳であるから、実際には塔に監視者がいなくとも、収監者は見られている（かもしれない）ことを内面化すれば、実際に見ていることと同じ効果が得られる（見ていないが、しかし、見ている；いないけどいる；いるけどいない）。近代は、一方で、自由意志に基づく近代主体を立ち上げたが、他方で、まなざしによる（つまり、「見る／見られる」という関係で）客体としての主体（人間）が誕生するのである。

この客体としての人間は、自然科学と同様に、人間科学・社会科学の研究＝観察対象となる。これはまた、自然科学と同様に、「見ること（観察すること）＝知ること」によって、その対象を支配・管理・統制するものとなる。この客体としての人間、研究対象となる人間が文化研究・文化表象に含意するものは、サイード（1993年）が『オリエンタリズム』のなかで、鋭く分析したように、見ること、そして、それを表象することによって、他者を支配・管理し、そのために科学（学問）がなされている。さらに、科学が装う客観主義は、対象をありのままに描く（文化研究の文脈では、他者・異文化）とされる。しかし、「見る」「観察」する主体（＝研究者）が、自らの視覚的感覚や自らの経験や文化性に基づいた記述は、主観的であり、ドクサであるとされるため、自然科学の場合と同じように、数学的手続きや実験、そのほかの正統とされる、つまり客観性を保証する方法によって、客体としての人間の客観性を再現する。そのことによって、「研究対象を知る＝支配・管理（手中に、正確には、眼中に収める）」し、客体としての自然の場合と同様

---

27) pan-は「すべて」、-opticonは「見る」という意味であるから、「全展望監視システム」「一望監視施設」などと訳されている。

に、予測可能な社会システムを作り出す<sup>28)</sup>。「管理する＝見る＝知る主体 the knower」と「管理される＝見られる＝知られる客体（としての人間） the known」という関係は、「知と権力」の関係を示唆している。

最後に、この知と権力をめぐる問題に関し、実際は「見る」「観察」する主体（＝研究者）があるにもかかわらず、正統な方法で映し出された対象のみが問題となり、そうした観察者の地位（利害関心・価値判断・先入見、文化性<sup>29)</sup>）は不可視化・透明化されることに言及する必要があるだろう。この見る主体を不問にする構造がなぜ可能なかを問う必要があるである。しかし、この点については、本論文の最後に他の問題とあわせて論じることにする。

### 3 主体／客体（対象）と表象

本論文がこれまで明らかにしてきたように、近代は視覚を特権化してきた時代であり文化である。これまで視覚特権化の諸側面（主客分離・均質空間・近代科学・知と権力）を半ば別々に扱ってきたが、本節では、ハイデガー（ハイデッガー）（1962年）<sup>30)</sup>の論考を依拠しながら、これまでの議論を有機

---

28) ここでは議論を簡略化するために、知の生産者・媒介者（研究者＝教育者）が創造した知・真理を受動的に受容する知の消費者（例えば、生徒・学生・読者；本論文の文脈では、客体化される人間一般）を想定している。実際はそう単純なものではないであろう。「自発的従属」（佐藤，1996年）と呼ばれる、自らがそれを望ましいと能動的に受容するメカニズムについては、機会を改めて考察することにした。

29) 例えば、なぜある特定の人々を特徴あるものとして（例えば、問題あるものとして）、研究者は「対象」とするのかなどである。しかし、そこにはどのような利害関心があるのかということは、科学では不当な質問である。本来、観察者は、観察する主体であると同時に、あるシステムの中にあり、その中にある規則を遵守する主体でもある（observeは「観察する」「遵守する」の両方の意味がある；この点に関しては、ブルデュー（1990年）、および酒井（1997年）を参照のこと）。

30) 「ハイデガー」という表記と、「ハイデッガー」という表記の両方が見られるが、本論文では、「ハイデガー」で統一する。

的に関連付けてみたい。とりわけ、対象と表象の問題、主体／客体の分離の問題の二点を中心に考察する。表象とはこれまでも使用してきたが、英語の representation の訳語であり、re-「再び」、-present「現前化する」から、「すでにあったものを今ここにあるようにする」ことであり、「『そこにはない或るもの』を『別の或るもの』で代行すること」から、「代行性」「舞台上演」を表す（渡邊・渡辺・浅田，2002年，13ページ；強調原典）<sup>31)</sup>。

### 3.1 像としての世界＝客体：実体という表象

ハイデガーは、その著書『世界像の時代』のなかで、その著書の題名どおり、近代を「世界像の時代 Die Zeit des Weltbildes」と名づけ、特徴付けている。それは、近代の本質的特徴が、(周囲)世界を目に写る像として捉えるようになったことにあるということである。彼は、この著書の中で、近代の特徴として、(1) 学問 (近代科学)；(2) 機械技術；(3) 生の表現としての芸術；(4) 価値としての文化；(5) 神々の退場をあげている。その中で、(1) 学問 (近代科学) という営為に限定し、その特徴を論じることによって、近代の特徴 (文化) を提示している。彼によれば、学問的営為、つまり研究とは、存在するものを対象化＝表象すること（「前に - 立てること Vorstellen」）によって捉えることであり、「対象化＝表象することとは、計算し、処理し、確保し、利用するための量的な存在として存在を捉えることである」（HP「哲学の劇場」）。この対象を操作・支配・管理する点については「人間中心主義」、つまり、人間が世界の主人（主体）となることとして、すでに述べたことである。

31) この「表象」は、「記号 sign」と非常に似た概念であるが、前者の方が「図像のような文節の困難な対象をも包括し得るし、また『再 - 現前化』の作用によってより感覚的で、身体的な現象をも示し得る」（渡邊・渡辺・浅田，2002年，14ページ）ので、より包括的な概念である。

このハイデガーの指摘で重要なのが、「対象化＝表象すること（前に-立てること）」によって、対象が像となるということである。つまり、本論文の中で「対象」と表現されたものは「表象」である。本論文で用いてきた対象（客体）とは実体性（存在）を伴ったものとしての対象であったが、ハイデガーは目に映し出された像という意味で、対象とは「表象」であるとした。つまり、「実体（＝客体・対象）という表象」なのである。したがって、the knower/the known という表現は、むしろ the knower/the representational-ly known と表現されるべきであろう。

### 3.2 主体／客体の同時的成立：Subject の意味の変質

さらに、この対象が世界像として構築されること、つまり、表象としての対象（客体・世界）の構築は、同時に（近代的）主体（Modern Subject）も形成されることを意味すると、ハイデガーは主張する。この「対象化＝表象化」の働きは、とりもなおさず、主体の働きである。これまで本論文で遠近法の観点から考察してきたように、像として捉える「目（視覚）」の特権化が主体の構築の密接なかかわりがある。「見る」主体の働きのなしに、この対象化＝表象化は起き得ない。また、遠近法が主体／客体の分離（「見るもの」と「見られるもの」）と密接に関わっていることも、本論文で指摘したとおりである。

ハイデガーはこの主体／客体の分離に関し、近代という時代は、一方で、中世的呪縛を逃れ、人間精神を確立し、世界の中心に立つという、主体の時代である（主観主義；人間中心主義）と同時に、先に科学主義で見たように、客観主義の時代でもあったことを指摘する<sup>32)</sup>。ハイデガーは、この二つの分

32) ハイデガーによれば：

近代は、人間の解放に伴って、主観主義と個体主義とを導いてきたことは確かです。しかも同時に、近代以前のどんな時代も、近代のそれと比べられるほどの客観主義は創られなかったし、また近代以前のどの時代にも、集団的なものの形態をなす非個体的なものが、このように通用することなど、決してなかったこともまた、確かです。(25ページ)

離が必然的な共犯関係にあることを指摘している。つまり、主観が立ち上がることと客体が成立することは、いわば、コインの表と裏であるとしている。この点について、ハイデガーに依拠しながら、もう少し詳しく考察してみる。

ハイデガーは近代の本質的根拠を理解する上で決定的なことは、「人間がズブエクト *Subjekt* となることによって、人間の本質が一般化すること」(26ページ)であるという。「人間が主体となることによって、人間の本質が一般化すること」の意味を、彼は *Subject* (*Subjekt*) の語源であるラテン語 *Subjectum* (この語は、ギリシャ語「ヒュポケイメン (基体)<sup>33)</sup>」のラテン語訳である) の意味に言及しながら、論じている。それによると、この *Subject* という語は、本来、人間や自我とまったく関係がなく、「まえに-横わっているもの、根拠としてすべてをおのが上に集めているもの」(26ページ; 強調筆者) ものであった<sup>34)</sup>。すなわち、*Subject* は「世界の基体」という意味であり、人間を指す言葉ではなかった。近代という時代の本質は、この *Subject* が人間と結び付けられ、人間が「その上にすべての存在するものが、その存在と真理という仕方において基礎付けられているような、そのような存在するもの〔基体的主体〕になる」であり、「人間が、存在するものそのものの関与の中心となる」(26ページ) ことであると、彼は主張する。対象を我がものに収める (本論文的には、「目」に収める) という人間中心的世界観である。

33) ギリシャ語の綴りは“*hypokeimenon*”である。

34) *Subjectum* は「万象の根底に横たわる最も基本的な実在を意味し、世界存在を世界たらしめる基本的で中心的な存在」を意味している。「世界を世界たらしめる『基体』は、また、歴史を形成する能動者も意味する。そうした世界や歴史を支える『基体』は、古代ギリシャにおいては『自然』であったし、中世ヨーロッパにおいては『神』であった。」(HP「予備概念—『主観と客観』」)

また、『哲学・思想事典』(廣松ほか、1998年)には：

*hypokeimenon* とその訳語 *subjectum* は、古代から近代初頭までは一貫して「基体」と「主語」を意味していた。そこにはカント以降の「主観」という意味はまったくふくまれておらず、むしろ「基体」という意味での *subjectum* は心の外にそれ自体で自存するものである。(主観の項、734ページ; 強調筆者)

と説明がある。



ハイデガーは、この「Subject = 世界の基体としての人間・主体」という結びつきができるためには、先に述べたように、世界が像として捉えられるという変化が必然であると主張する<sup>35)</sup>。そのなかで、彼はラテン語の *repraesentatio* (英語の *representation* ; ドイツ語の *vor-stellen* の基になったもの)<sup>36)</sup> について説明をする。それは「<手前にあるものを、対して立つものとして、自分の前にもってくること>、<前に立っているものへと自分を関係付け、そしてこの関係の中へと、基準的な領域としてのみずからに対して、立ち戻って強いること>」(32ページ)である。こうして、人間の前に置かれた対象(ハイデガーの表現では、「存在するもの」と対峙する意味において、「人間は存在するものの代表者<レプレゼンタント *representant*>になる」(32ページ)。

そして、存在するもの(存在するものの表象されてあること)がより確実なもの、確たるものとして表象されればされるほど、人間の主体的基体=人間中心主義はより確たるものになるとハイデガーは主張する。ハイデガーの主たる関心は、自然科学(近代物理学)であるが、すべての表象される存在へ敷衍して考えることができる(たとえば、社会科学など)。この存在の表象が数学的に計算され、処理され、利用するための量的存在としてなされることによって、確かさをもった存在になればなるほど、つまり、本論文的には、人間の目の中に確固として収まれば収まるほど、その存在の支配者とし

35) 『哲学・思想事典』(廣松ほか、1998年)による、ハイデガーの近代主体の説明は：

他に依存せず<sup>36)</sup>にそれ自身で自体的に存在するもの、すなわち基体・主体(〔ラ〕*subjectum*)の位置を占めるのは、デカルトの時代以降、神でもなければ一般の事物でもなくて、人間理性であり、理性としての人間こそ他のいっさいに対する「主体・主観」の意味をもつようになり、理性的主体(としての人間)以外のいっさいはこの主体・主観に「対して」ある形姿、「対-象」となる。(735ページ；「主観主義」の項；強調筆者)

とある。

36) *repraesentatio* の意味は “a bringing before one (あるものの前に持ってくること)” である。

ての人間（人間中心主義）、つまり主体的基体としての存在もまた確固たるものになる<sup>37)</sup>。そうした意味で、存在が表象されてあることと近代主体の誕生は同じことである。ハイデガーは言う：

世界が像となることは、人間の存在するものの内でスプエクトゥム [Subjectum] となる、というできごととまったく同一なのです。(34 ページ)

#### 4 おわりに

本論文は近代性を視覚の特権化という観点から、近代性の理解を試みた。その中で、イタリア・ルネサンス期に成立した遠近法とそれが含意するものを中心に論じてきた。それは、主体・客体の分離的構築であり、均質な空間の成立、「見ること」と「知ること」が一体化する近代科学（客観主義）、そして、知と権力の問題（見ることの制度化）であった。知と権力の問題は、世界の中心として客体＝自然を管理する人間中心主義的世界観と、「見る／見られる」という関係が人間にも当てはめられることによって成立する客体としての人間について論じた。そして、その中で、「見ること＝知ること」と権力の関係について考察した。最後に、本論文はハイデガーの「世界像の時代」に言及しながら、「見る／見られる」という関係から成立する客体が実体性を伴ったものという意識は、実は実体・客体（対象）という表象であることを示した。また、主客は相互独立的に存在するのではなく、主／客は同時的・共犯的に構築されることを論じた。

37) ハイデガーの表現によれば：

世界が征服されたものとして、ヨリ包括的にヨリ徹底的に処理に任され、客観がヨリ客観的に現れれば現れるほど、それだけますます止めがたく世界－観と世界－論とは、人間論へと、人間学へと変貌するのです。(35ページ)

である。

本論文を結ぶに当たり、本研究から示唆される以下の二点を指摘することにした。第一は、ハイデガーの世界像という指摘、つまり、こうした主客分離を前提とした「実体」という表象（提示）のされ方を可能にする制度・権力・装置を研究する必要があるのではないかということである。つまり、表象のテクノロジー、表象装置、権力と知の表象といったことから考察する必要があると思われる。

第二に、文化研究とコミュニケーション（表象）研究を結びつける必要性を本研究は示唆している。これまでの異文化コミュニケーション研究はコミュニケーションを所与のものとして考えてきており、文化研究ではあっても、コミュニケーション研究ではないのではという批判がある。こうした批判に対し、本論文は文化とコミュニケーション（表象）を有機的に結び付けて研究するコミュニケーション研究の重要性を提示できたのではないか。それは、つまり、表象をコミュニケーションと文化を結びつけるものとして研究することである。そして、表象をめぐるテクノロジー、装置といった問題を文化研究の文脈に載せることである。

#### 引用文献

- 池田理知子・エリック・クレマー（2000）『異文化コミュニケーション・入門』有斐閣。
- 犬伏 雅一（1997）「視覚変容の位相：遠近法と写真」日本記号学会（編）『感覚変容の記号論（記号学研究17）』（127-140ページ）東海大学出版会。
- 今村 仁司（1994年）『近代性の構造：「企て」から「試み」へ』講談社。
- イマニュエル・ウォーラステイン（2002）『世界システム1』藤原書店。
- 生越 利昭（1999年）「視覚の社会化：『観察者』視点の生成」大林信治・山中浩司（編）『視覚と近代：観察空間の形成と変容』（146-181ページ）名古屋大学出版会。
- W-J. オング『声の文化と文字の文化』桜井直文・林正寛・糟谷啓介（訳）藤原書店。
- エルンスト・カッシーラ（1994）『シンボル形式の哲学』木田元（訳）岩波書店。
- エリック・クレマー（2002）「『地球都市』の出現とコミュニケーション」伊佐雅子（監）『多文化社会と異文化コミュニケーション』三修社。

- アルフレッド・W・クロスビー (2003)『数量化革命』小沢千恵子 (訳) 紀伊国屋書店。
- サイード・エドワード (1993)『オリエンタリズム (上・下)』板垣雄三・杉田英明 (監修) 平凡社。
- 酒井 直樹 (1997) 『日本思想という問題：翻訳と主体』 岩波書店。
- 酒井 直樹 (2001)『論壇：「地球化」と国民幻想の逆説 21世紀の入り口で』朝日新聞，2001年1月3日。
- 佐藤 富雄 (1996)「教育と権力：自発的な従属を生み出すメカニズム」藤田弘夫・西原和久 (編)『権力から読みとく現代人の社会学・入門』(pp. 159-175) 有斐閣。
- 佐藤 康邦 (1997)『絵画空間の哲学：思想史の中の遠近法 (新装版)』 三元社。
- 杉本 良夫・ロス・マオア (1995)『日本人論の方程式』 ちくま学芸文庫。
- 戴 エイカ (1999)『多文化主義とディアスポラ』明石書店。
- 高山 宏 (2002)『表象の芸術工学』 工作社。
- F. テンニース. (1957)『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』杉之原寿一 (訳) 岩波書店。
- 中村雄二郎 (1992)「ルネサンスと人間の目の誕生：等身大空間の発見」(51-95ページ) 佐藤忠良・中村雄二郎・小山清男・若桑みどり・中原佑介・神吉敬三『遠近法の世界史：人間の目は空間をどのようにとらえてきたか』 平凡社。
- 西川 長夫 (1995)『地球時代の民族=文化理論』 新曜社。
- 西川 長夫 (2001)『[増補] 国境の越え方：国民国家論序説』 平凡社。
- ハイデッガー (1962)『世界像の時代』桑木務 (訳) 理想社。
- E. パノフスキー (2003)『<象徴形式>としての遠近法』木田元監訳 哲学書房。
- 廣松 渉・子安 宣邦・三島 憲一・宮本 久雄・佐々木 力・野家 啓一・末木文美士 (編) (1998)『哲学・思想事典』 岩波書店。
- ミシェル・フーコー (1977)『監獄の誕生：監視と処罰』田村俣 (訳) 新潮社。
- ピエール・ブルデュー (1990)『実践感覚』 藤原書店。
- ベフ・ハルミ (1997)『イデオロギーとしての日本文化論』思想の科学社。
- 丸山 真純 (2002)『異文化コミュニケーション論を再考する：「文化ナショナリズム」を越えて』*Human Communication Studies*, 30, 69-90。
- 丸山 真純 (2004)「近代と時間：その文化性と歴史性」*Human Communication Studies*, 32, 45-68。
- ルイス・マンフォード (1974)『都市の文化』生田勉 (訳) 鹿島出版会。

- テッサ・モーリス＝鈴木 (1996) 「文化・多様性・デモクラシー：多文化主義と文化資本の概念にかかわる小考察」『思想』867, 38-58。
- マーシャル・マクルーハン (1986) 『グーテンベルクの銀河系：活字人間の形成』森常治 (訳) みすず書房。
- マーシャル・マクルーハン (1987) 『メディア論：人間拡張の諸相』栗原裕・河本仲聖 (訳) みすず書房。
- 山中 浩司 (1999) 「序 目覚めたものための人工の夢」大林信治・山中浩司 (編) 『視覚と近代：観察空間の形成と変容』(1-18ページ) 名古屋大学出版会。
- リチャード・ローティ (1993) 『哲学と自然の鏡』野家啓一 (監訳) 産業図書。
- 渡邊 守章・渡辺 保・浅田 彰 (2002) 『表象文化研究：文化と芸術表象』放送大学教育出版会。
- 養老 孟司 (2002) 『人間科学』筑摩書房。
- 吉野 耕作 (1997) 『文化ナショナリズムの社会学：現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会。
- 吉見 俊哉 (1994) 『メディア時代の文化社会学』新曜社。
- 吉見 俊哉 (2004) 『メディア文化論：メディアを学ぶ人のための15話』有斐閣。
- Gebser, J. (1985). *The ever present origin*. (N. Barstad & A. Mickunas, Trans.). Athens, OH: Ohio University Press. (Original work published in 1949).
- Gudykunst, W. B. & Kim, Y. Y. (2003). *Communicating with strangers* (4<sup>th</sup> ed.). NY: McGraw-Hill.
- Kramer, E. M. (1992). *Culture and consciousness: An introduction to the thought of Jean Gebser*. Westport, CT: Greenwood.
- Kramer, Eric. M. (2003). "Cosmopoly: Occidentalism and the New World Order." In E. M. Kramer (Ed.), *The emerging monoculture: Assimilation and the "Model Minority."* (pp. 234-291) Westport, CT: Greenwood.
- Littlejohn, S. W. (1992). *Theories of human communication*. 4<sup>th</sup> Ed. Belmont, CA: Wadsworth.
- (オンライン・ソフトなど)
- 『マイクロソフト・エンカルタ総合大百科2003』 マイクロソフト。

『ネットで百科』 平凡社／日立システムアンドサービス。

OED Oxford English Dictionary, 2<sup>nd</sup> Edition on CD-ROM Version 3.0.

(ホームページ)

『空間概念の変容』 Retrieved from “[ziggy.c.u-tokyo.ac.jp/files/lec98ss1.html](http://ziggy.c.u-tokyo.ac.jp/files/lec98ss1.html)” on 2004/2/3.

黒崎 政男 『<世界像>の時代としての近代』 Retrieved from “[www.ntticc.or.jp/pub/ic\\_mag/ic015/kurosaki/kurosaki\\_9\\_j.html](http://www.ntticc.or.jp/pub/ic_mag/ic015/kurosaki/kurosaki_9_j.html)” on 2004/07/27.

『哲学の劇場』 Retrieved from “[www.logico-philosophicus.net/gpmap/books/Heidegger-Martin002.htm](http://www.logico-philosophicus.net/gpmap/books/Heidegger-Martin002.htm)” on 2004/02/03.

『予備概念—「主観と客観」—』 Retrieved from “<http://www5d.biglobe.ne.jp/~enishida/yobigainen01.htm>” on 2004/07/28.

“*televisuality*” (“spectatorship;” online lecture at New School University) Retrieved from “[www.newschool.edu/mediastudies/tv/channel3/index.html](http://www.newschool.edu/mediastudies/tv/channel3/index.html)” on 2004/07/30.